

ボランティア学生の自律的思考の促進とモチベーション維持モデルの検討

Motivation Maintenance Model including Promotion of Autonomous Thinking for Volunteer Students

三上 滉史, 真嶋 由貴恵, 榎田 聖子
Koji MIKAMI, Yukie MAJIMA, Seiko MASUDA

大阪府立大学 現代システム科学域
College of Sustainable System Sciences, Prefecture University
Email: saa01251@edu.osakafu-u.ac.jp

あらまし: 若者の社会参加意識が高まる中、ボランティア活動を行う学生は責任が伴う機会に遭遇することが多いことから、様々な視点で考え、自律的な思考とモチベーションを維持することが求められる。そのため、特に長期的なプロジェクト型ボランティアに参加する学生には精神的疲弊が見られる傾向が多い。そこで本研究ではボランティア活動に参加する学生において自律的思考を育成し、モチベーション維持ができるモデルの検討を行う。

キーワード: 学生ボランティア活動, 自律的思考, モチベーション維持モデル

1. はじめに

東日本大震災をきっかけに、若者の社会参加意識が高まっている。20代を対象に「何か社会のために役立ちたいと思っているか」を尋ねた内閣府世論調査結果では、「思っている」という回答が震災後に10%以上増加していることがわかった⁽¹⁾。

しかし、若者の社会参加、つまり学生のボランティア活動では、途中で来なくなるなど活動の継続が困難な傾向がある。特に、プロジェクト型ボランティアに参加する学生に見られることが多い。その原因として精神的疲弊とモチベーションの低下が考えられる。

ニティンら⁽²⁾は、モチベーションを「絆への欲動」「理解への欲動」「獲得への欲動」「防御への欲動」の4つの欲動(表1)から成り立つものと定義し、さらにこれらは複雑に絡み合い、全ての欲動を満たして初めてモチベーションへとつながると述べている。しかし、ボランティアの活動でのモチベーションを維持するために、これら4つの欲動を同時に満たすことは難しい。

表1 モチベーションの4つの欲動

欲動	内容
絆への欲動	仲間が存在を認められ、仲良く行動を共にしたいという欲求
理解への欲動	新しいことを学ぶこと自体に感じる面白さへの欲求
獲得への欲動	目標に向かって何か成し遂げたい、やりがいへの欲求
防御への欲動	外部の脅威から身を守る、生存に関わる欲求

途中離脱の課題においては、細井ら⁽³⁾の運動継続に関する研究で、複数の運動から各自に選択させたところ、継続行動が見られたことを報告している。つまり、ボランティア活動を継続させるためには、

モチベーションを維持し、各自が自律的に行動できるようなシステムが必要だと考えられる。

そこで本研究では、ボランティア活動におけるモチベーション維持の状況を調査したうえで、その維持モデルを検討する。さらに、そのモデルを評価する項目についても検討する。維持モデルにおいては、自律的思考を促す要素を組み込み、継続した活動の促進を目指す。

2. ボランティアのモチベーション

ボランティア活動に対する精神的疲弊感・モチベーションの状況について調査する。

2.1 インタビュー調査

調査に同意の得られた、日常生活でボランティア活動を行っている40代以上30名、大学のボランティアセンターを利用してボランティア活動を行っている学生10名を対象に、「ボランティア活動に対してのモチベーション低下とその理由」についてインタビュー調査を行った。

その結果、40代以上は身体的なしんどさを感じている反面、学生は精神的なしんどさを感じていることがわかった。具体的な内容を表2に示す。

表2 インタビュー調査結果まとめ

対象	しんどさの具体的な内容	
40代以上	<ul style="list-style-type: none"> 足腰が弱いためしんどかった 具体的に衰えてきた 体力的にしんどい 	身体的
学生	<ul style="list-style-type: none"> 一緒にやっていく人との関係性 自分のやりたいことと活動の主旨がずれている 勉強が忙しい時期に休めない空気の時 	精神的

2.2 モチベーション変動調査

ボランティア活動前後でのモチベーションの変化

を調べるために、普段から様々なボランティアを行い、モチベーションの低下・精神的疲弊を感じる事がよくある某大学のAさんに、授業やボランティアなどの日常生活での活動に対して、各活動前後のモチベーションを100点満点で自己評価してもらった。その結果を表3に示す。これより、授業等の日常生活と単発ボランティア活動は、活動前の方がモチベーションは低かった。一方、プロジェクト型ボランティア活動では活動後の方がモチベーションが低くなっていた。後者の理由には、「数人でやる作業を一人でやっていた」「期限が迫っていた」「体調不良気味だった」などが挙げられ、大規模の活動が個人の能力に依存してしまうことがその個人のモチベーションの低下につながる事がわかった。

表3 一週間の活動別モチベーション (点)

活動内容	活動前の 平均値	活動後の 平均値
日常生活、 単発ボランティア活動	36.5	53.9
プロジェクト型 ボランティア活動	50.0	33.3

3. モチベーション維持モデルの提案

ボランティア活動におけるモチベーション維持モデルの組織設計にあたっては、Aさんのモチベーション低下の理由を参考に、個人の活動にならないようプロジェクトグループとすること、コーチングをはじめとしたマネジメントができるようなコーディネーターを設置すること、を考えた(図1)。

表4は、モチベーションの4つの欲動において、具体的な内容を対応させたものである。

モチベーション維持を支援する上では、これら4つの欲動を満たすことを前提に行動する。

まず、独立したリーダーという存在を無くし、グループ単位での行動をするように仕向けることで「絆への欲動」を満たす。

次に、コーディネーターはグループに対し質問を投げかけるなどし、達成目標を明確化し「獲得への欲動」を満たす。また、グループメンバーは目標に向けて行動することで自律的思考を促進する。

さらに、仲の良い人同士でプロジェクトグループを形成させコミュニケーションを取りやすくすることで、個人の状況の共有が容易になり活動を継続できる「防御への欲動」を満たす。同時に、お互いの価値観を学びやすくすることで、「理解への欲動」を満たす。

表4 モチベーションの4つの欲動への対応

欲動	内容
絆への欲動	プロジェクトグループの明確化
理解への欲動	プロジェクトグループ内の コミュニケーション
獲得への欲動	コーチングによる達成目標の明確化
防御への欲動	グループ内で活発に進捗状況を確認

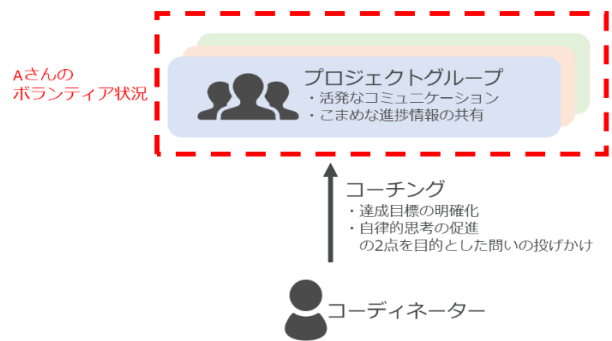


図1 モチベーション維持モデル

4. 活動に対するモチベーション評価

モチベーションの4つの欲動とモチベーションを図る指標(2)から、モチベーションを評価する項目を考えた。表5に評価項目と欲動と指標の対応を示す。

表5 モチベーション評価項目

欲動	指標	評価項目
絆への欲動	離職意思	活動をやめたくないと思うか
	従業員満足度	組織メンバーと仲は良いか
理解への欲動	仕事への愛着	活動についてもっと知りたいと思うか
獲得への欲動	仕事への愛着	活動にエネルギーを注げるか
	コミットメント	活動にやりがいを感じるか
防御への欲動	従業員満足度	組織に不満はないか

5. おわりに

今回、ボランティア活動におけるモチベーション低下に対する課題解決と自律的思考を促進するボランティアシステムの構築のために、自律を促すモチベーション維持モデルを検討し、6つの評価項目を作成した。

今後、検討したモデルと評価項目を使用して、ボランティア活動を行っている学生に対し検証を行う。

謝辞

本研究のインタビュー調査にご協力いただいた方に感謝する。

参考文献

- (1) 内閣府: “社会意識に関する世論調査”, <https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-shakai/index.html> (2011)
- (2) Nitin Nohria, Boris Groysberg, and Linda-Eling Lee : “Employee Motivation A Powerful New Model”, 動機づける力-モチベーションの理論と実践-, pp.39-62, ダイヤモンド出版社 (2008)
- (3) 細井俊希, 新井智之, 丸谷康平, et al.: “行動科学の理論を応用した運動指導が地域在住高齢者の運動実施に与える影響”, 第49回日本理学療法学会大会抄録集, Vol.41, Suppl. No.2 (2014)